

# 寄書

荒寥

謂光主人

此の頃、あまりに徒然に覺ゆるものから今朝しも我は、こよなき友寫生帖を懐ろにして、ふと家を出てぬ。常にかまびすしき鹽田浦も打ち續く四五日のあらしにて、休み茶屋などには人の氣はいもなし。只見るは太東岬の鯨の如く、インヂゴ色に綾なせる大海原に横はり、近くの日在浦には地引の網ひけるあるのみ、寂莫荒寥へは、我が心の叫びなりけり。『兎角して、東の方は益々赫くなり雲は愈よ美はしの色彩を呈し來ぬ。先づスケッチブック取り出して明け行く空に映ずる砂原を前に、我が嗜好に適せる番小屋を主とし、又遠景には朝霧に霞む新田の山を見て、淋しき内にも平和なる畫一つを寫しぬ。』余念なく筆を走らすうち刻、一刻、日は高くなりぬ。我が畫も亦成功に近づけり。偶々前なる丘に人あるを見る。其の起居宛然景を寫す人の如し。やがて七時ともなりけるに、草は漸く色好く、日は白砂に照り榮えて、美云ふばかりなし。我が

畫、茲に漸く成る。則ち立て前の丘に登るに、先きに我が暫し人は果して畫家にして然も此の人が久しく逢はざりし親友秋月君ならむとは。『やあ君!!! あゝ、あゝ、互に言ふに辭なく、述ぶるに筆なし、只懷舊の情た堪へず、走り寄りて手を握り合ふばかりなり。』

彼の語る所によるに、四年の昔、我と袂別して以來、彼は一只に洋畫を學び、今は可成の作も出來得との事なるが其の間、父兄の迫害、世間の冷酷、加ふるに資力の缺亡とにより、彼は大なる困苦をせしとの事。

然し今は多少の餘裕を得て更に其の技を研くべくこの十日には渡米すべくこゝ四五日の休養に當地に遊べるなりといふ。實に友の顔には何處ともなき希望の光満ちたりき。『其の日より、余は日毎彼を訪れぬ。彼も亦我が庵戸を叩くを例とせり。十日は早や明日となりぬ。乃ち豫れての約とて、送別の小宴をこたび逢ひ見し彼の小丘に開きぬ。嗚呼、かの我が畫中の丘!!!、汝は幾久しく我が紀念とこそなるならぬ。呑干す麥酒既に數を重ね、醉極まらむとして興益々

深し、折しもよし近く管弦の客あり、我が爲めに離別の曲を奏す、其の聲泣くが如く悲しむが如く、慕ふが如く、訴ふるが如く、餘韻嫋々として斷腸の感あり。興は盡きれど夜は更けぬ、即ち近隣なる旗亭に入りて宿せり、翌早朝我が友は、遠き海外に旅立てり。我も亦其の次ぎの日千葉の人となりぬ。無味にして單調なる寄宿生活、豈、希望ならむや。只我が心をして慰め且趣味多からしむるは、鹽田浦の某丘の寫生畫一葉のみ。嗚呼、如何にしてか、我、汝と離れ得べき。蟬の聲喧しき夏の綠陰に、白露野に光る初秋の夕、幾何の昔なりしか、今は紅葉の散り敷く晩秋となりぬ。然して變らぬ者は君ばかり。汝の荒れて淋しき其の姿何とて我には嬉しきものかな。』

數學の先生

石見 孤齋生

雨が止んだ、アラッ、、、、、。黒澄んだ、お庭の松の木の間に、たつた今、水で洗つたよーな、十五夜の満月が、、、、。木々の葉末に置く露玉にキラキラと映じて、なんとも云へない目の醒めるよーな、雨後の景!。『寫生ダッ』、私はこゝ叫んで書

齊から、手探りで寫生箱を、持ち出して、橋本さんが洋畫一班で云はれた西洋蠟燭の光で、セツセと寫生に取りかゝる。空の色がウマイ事出來たそれから月の色が出來た、大下先生の、教へた重潤で、ヤツてのけたが見事傑作、間然するところが無いと自分でホクホク喜んで居ると、數學の教員をして御座る一番の兄さんが後から『フン寫實々々つてやかましく云ふがコリヤ何故月の斑點を畫かないんだッ！』。

### 繪畫の利益

但馬 郎生

繪畫の利益如何とは、一大問題で到底愚なる僕の喋々たる論を差し入るゝ餘地がないが、おこがましいとは知りながら感ずるまゝに述べれば第一が修養上の利益だ。一體僕等の國の如き山又山の村落ばかりでは都會のやうに、一般社會に對する諸般の煩事交際等を學ぶ機會に乏しい。然ながら昔よりの英雄は多く山間僻地より、出て居る事は僕の言をまたずして諸君の知らるゝ通りだ。そは外界の人々の教化がよいわけでない又學校等の教育の都會にまさつて居る譯もないのだ。然るに人煙も

まれなはかない田舎から英雄の多く出づるのは何故であらうか僕は之は自然の万物が此の人物に英雄となるに足るだけの教訓を與へたものと信ずる。海の万里茫茫たるを見ては、其の度量の偉大なるに感化せられ、巖の巖として打よす波にくだけもしない様は剛毅屈せざる教を與へるのだ。世は寂として、さわがしからぬ秋の月住なれし鎮守の晚鴉は沈黙を教へ或は悲哀を教へ万事皆吾人の教育者なり

さるが故に、田舎漢は遂に絶大の英雄となつたのである

然して都會は紅塵万丈人事輕薄にして田舎は幽遠閑雅なり、都會は似非風流にして田舎は自然に閑雅なる神の手に眠れり。故に大人物はたまに一世を獨歩するのだ。而して此は自然の神の手に養れたのだ。故に僕は修養の容易なる方法は自然を愛する事によりて得らるゝ事と思ふ。高尚なる精神を養ふには、繪畫を第一とする其は繪畫は自然の化身なるが故に。然ながら僕は世の人を皆畫家となれと言ふのではない、只其によりて得たる修養の節

々を諸君の理想の上に發揮せられん事を希ふのみである。暇あらば諸氏よ畫の友となれ、自然は諸君をして必ず善良の人とするだらう。

必ず自然を愛せよ、再言ふて筆を置く。空は青空見る見る内に白き雲が山の上に出た段々きれて上の方に飛んで行く後のは先を追ふて。

庭の黄ばんだ白楊の葉が吹く風にちら／＼飛びあはれに落ち行きた。

寸時もゆるかせにせず活動せよ、活動の裏には落葉の衰亡あるを忘れず。いざさらば!!!

### パレット寸言

孤筆生

○ワニスに水彩繪具を混せて油繪の眞似をしたのは善かつたが 大切なパレットをだいなしにしたのはマツカッタ。

○(フンこれが西洋のデコだとあきれらァ赤い色や青い色でにしくつた下品でしょーがないやそれよつか私んこの襖のすみ繪がとれほど善いか知れネエ)とは田舎老人の水彩畫を見ての大した氣焔。